
水色の季節にまた・・・～今はまだ今のままで・・・～

美奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水色の季節にまた・・・今はまだ今のままで・・・

【Nコード】

N0155A

【作者名】

美奈

【あらすじ】

今、この幸せな時が・・・平凡な時が・・・ずっと・・・ずっと続くと思ってた……。一時も休まることなく、白く、美しい音色が響きわたっていると信じていた。でもそんな俺の考えは意図も簡単に砕け散った……。

プロローグ 近づいてくる黒い音色

水色の季節にまた・・・今はまだ今のままで・・・

プロローグ 近づいてくる黒い音色

俺は気づかなかった。

これから奏でる音色を・・・

今、一歩一歩近づいてきている、黒い不気味な影を・・・

迂闊だったんだ・・・今の平凡な暮らしに慣れて・・・

いつもなら心安らぐ音色が・・・

いつもなら心癒してくれる音色が・・・

いつもなら心温まる音色が・・・

地獄へ引きずり込む音色になってしまっているとは気がつかなかった。

大切な・・・

この世で一番泣かせたくないヤツに、危険が迫っているなんて・・・

いつもなら美しい音色が・・・

いつもなら優しい光になる音色が・・・

いつもなら子守唄になる音色が・・・

悪魔のしもべと化していることに・・・

この時俺は気がつかなかった・・・

第一章 幸せの色が変わる時

第一章 幸せの色が変わる時

「お父さん、いつてきまゝす！」

「おじさん、いつてきます。」

「・・・おう。いつてこい。」

この時からだったんだ。

おっちゃんが無気なことに、俺は気がつかなかった。

お酒で酔ってくるからでなく、恐怖が襲っているからだと知らずに・
・

おっちゃんにはもう聞こえていたんだ・・・

悪魔の音色が・・・

「コナン君vv」

「よお、コナン。」

「おはようございます。コナン君。」

「おはよ。」

「おう。蘭姉ちゃん、いつてきます。」

「いつてらっしやい」

蘭は満面の笑みを浮かべた。

いつまでも、この光景が続くと思っていた。

一時的たりともこの光景は終わることが無いと、一時的たりとも黒い影に覆われる事が無いと、俺は信じていた。

でもそんなことが続くはずが無いと、このあと思い知らされた。

ソウダヨ・・・・・・・・ズットコノセイカツガ、ツヅクトオモッテイ

タラ・・・オオマチガイダヨ・・・？
エドガワ・・・コナンクン・・・？・・・イヤ・・・クドウ・・・シ
ンイチクン・・・？

俺はまだ気がついていなかった。

悪魔の声に・・・

もう悪魔の演奏は始まっていたのに・・・

その音色に耳を傾けもせず・・・

生活していた・・・

影で苦しみ、悩んでいた人もいたのに・・・！

俺は気づいてやれなかった・・・

口では“探偵”とか言っているくせに・・・

気づいてやれなかった・・・

第一章 幸せの色が変わる時（後書き）

作者の雑談

えっと、今回の作品は全般的にコナンのキャラが違います。

コナンちゃん、弱気すぎ！

それでも続きを見てやるという心優しい方がいらっしやるのなら、心から感謝いたします。

第二章 瞼の裏側の闇

第二章 瞼の裏側の闇

そして俺はその日一日を普通に過ごした。

普通に授業をして・・・

普通にサッカーをして・・・

それでも気がつかなかった・・・
今思うと、

“ どれだけ鈍感なんだ・・・?! ”

と自分に対して苛立ちさえ覚える。

そして放課後・・・

俺はいつものように、少年探偵団と、灰原と帰っていた。
いつものように俺と灰原が後ろを歩いて・・・

「ねえ工藤君・・・」

「バカ！こんなところで工藤って呼ぶなって！」

「あつ・・・ごめんなさい。」

「あつ・・・いや、いいよもう。」

いつもなら反抗してくる灰原が素直に謝るので俺はびっくりしていた。

そして次の言葉と態度にはもつと驚いた。

「昨日、電話が・・・あつたの・・・。」

灰原は・・・すごく・・・すごく怯えていた。

「誰から？」

「・・・わからない。」

「へ？」

「こう・・・冷たく言い放つたの・・・。」『工藤新一が生きているって本当か・・・？もし本当なら工藤新一の居場所を教える・・・』

「な・・・!!」

「だから私、『わからないわ。何故私にそんなこと聞くの？』と尋ねた。そしたら・・・。」

「そしたら・・・なんだ?!」

「『お前の家に時々出入りしているという噂を聞いたんだ。』って・・・。」

「それで?!お前はなんて・・・。」

「もちろん、そんなことはないと言ったわ。そしたら・・・『フン・・・まあいい・・・。工藤に伝えておけ。明日0時に杯戸町6番地の港倉庫3番倉庫に来いと伝えておけ。』って・・・私は知らない

って言ったんだけど・・・」

「・・・わかった・・・しばらく様子を見よう。」

「そんなゆうちよなこと言ってられないわ！その人、こうも言ったわ。『お前が来なければ然るべき手段を取る。と伝えろ！』ってね・

・・・」

「何?!」

「もし、“然るべき手段”が彼女のことだとしたら・・・」

「彼女って蘭・・・か？」

「ええ。もし相手がそこまで調べていたとしたら・・・」

「・・・大丈夫だって・・・もし、そうだとしたら・・・明日学校休めばいいんだろ？蘭の帰ってくる時刻には蘭を待ち伏せして、途中で合流するとか・・・」

「彼女にはなんていって休むの？病気だったら、家を出ていたら怪しまれるわよ？」

「あつ・・・そうか。まあ、蘭だって決まったわけでもないし・・・一応気をつけとくよ。サンキューな、灰原。」

「どういたしまして。」

そして俺は探偵事務所に戻った。

「ただいま。」

「おう、コナンか。蘭遅くなるらしいから、飯、食いに行くぞ。」

「はあい。」

そして俺たちは近くのファミレスへ行った。

もくもくと2人で食べていると、おっちゃんが沈黙を破った。

「なあ、コナン・・・」

「ふえ？」

「オメー・・・工藤新一の居場所知らねーか？」

「・・・え？・・・」

イマナンテ・・・？

クドウシンイチのイバシヨ——・・・？

オレノイバシヨ・・・？

ナンドオツチャンガソンナコトヲキクンダ・・・？

「なん・・・で・・・そんなコト・・・聞くの？」

「昨日、こんな手紙が郵便受けに入っていたんだ。」

そしておっちゃん差し出した紙には、こう書いてあった。

我は黒の音色なり。

我は工藤新一を探している。

工藤に伝える。

明日0時に杯戸町6番地の港倉庫3番倉庫へ来い。

さもなければ、然るべき手段を取る。と。

「……………」

「……どうだ？」

「わから……ない。」

「本当か？」

「うん。」

「ならいい。悪かったな。」

「ううん。」

そして俺たちは探偵事務所に帰った。

本当はわかっていたんだ。

とだと……………。

“然るべき手段”が蘭のこ

すでに黒の音色による、黒の演奏が始まっていたことに……

第二章 臉の裏側の闇（後書き）

作者の雑談

作「ううう・・・意味不明・・・」

コ「おっ」わかってんじゃん」

哀「やっとなかったようね。」

作「じゃあしい！！わかってたけどというと悲しくなるんじゃい！

（泣）」

第三章 瞼の裏に潜む闇と真実、黒の音色による、試合（ゲーム）開始の鐘の歌

第三章 瞼の裏に潜む闇と真実、黒の音色による、試合開始の鐘の歌

なんとなくが感じていた……

瞼の裏側に存在する闇が大きくなっていったことを……

もう、しばらくは晴れ渡った、青空を見ることが出来ないということも……

微かに聞こえていたんだ……

悪魔のささやきを……

だが俺は気づかないフリをしていたんだ……

みんなが傷ついていたのに……

俺は守ってやる事が出来なかった……

そして次の日は晴れていた。

だが、俺の心は曇っていた。

何が起こるか予想もつかないが、何か起こりそうな、そんな感じがした。

「「いつてきまゝす！」」

俺と蘭はいつものように探偵事務所を出て、いつものように別れた。そして……

「どう？彼女の様子は？」

「別に変わったことはないけど、油断はできねー……。」「

「何故？」

「一昨日、お前が話してくれた文章と似たような文が事務所に届いていたそうだ。」

「なっ……！」

「ああ……もう予定の時刻は過ぎてる。昨日だったんだからな……」

「そうね……」

そして俺は暇さえあれば作戦を練った。

灰原はそれに気づいてか気づかぬか、少年探偵団の奴らを連れてどこかへ行ってくれた。

そして放課後……

パトカーの音が聞こえた。

俺にはその音が言っているのか、わからなかった。

その音（鐘）が試合の始まりを告げていたことを……

そして探偵事務所に着くと、

「ただい……ま……？」

そこには目暮警部、高木刑事、佐藤刑事、ほか5名ほど警察官が集まっでいて、ただならぬ空気が漂っていた。そして俺は悟った。

ああ……ついに……ついに……この時が来てしまったのだ……と……

もう止められない……

歯車が回ってゆく……

このときになって俺は大きな後悔に襲われた

なんでもっと早く気づいてやれなかったんだ？！

なんで聞こえないフリなんかしていたんだ？！

そして――…

願った

ああ………

もし神様がいるのなら

俺の愛しい人を………

俺の光を……

守って……ください……。

そして悟った…。

これからは闇との戦いなんだと――……

これから

一筋の月明かりを探して……

突き進むだけ……だと

もう元には戻れない……………

引き返せない……………

そして……………

一人の愛しい人が待つ場所まで……………

走り続けるだけ……………だと

第四章 遠くて近い場所

「ど．．．したの？」

「蘭が．．．誘拐．．．されちゃった．．．」

推測が、確信へと、真実へと変わった。

「犯人．．．の情報．．．は？」

「黒いスーツを着た、髪の長げえ奴だ．．．。」

「（ジンだ！）」

「要求は．．．？」

「．．．．．」

え．．．．．？

今．．．なん．．．．．て．．．？

「工藤新一を出せ．．．。」

そして、俺の中に渦巻いていた、悲しみが、怒りへと変わった。

何故俺を狙わないんだ・・・？！

遠回しにするんだ・・・？！

答えは簡単・・・

俺を・・・

苦しめる．．．．ため．．．。

大切な人を人質にし、俺を苦しめるため。

俺の思考を狂わすため．．．．。

そんなこと、最初からわかっていたはずではないか．．．？

心の片隅で、逃げていたんだ。

そんなはずがない．．．と。

一番奴等に怯えていたのは．．．

俺なのかもしれない……………

「それ……だけ？」

「ああ。」

「…………ボク、新一兄ちゃんに言ってくる！」

「ちよ、ちよと待て！お前、新一の居場所、知ってんのか？！」

「……！」

俺は、正直、戸惑った。

言っちゃおうか…………？

そう思ったとき、組織に対する、恐怖が、襲ってきた。

「知らない…………。でも、新一兄ちゃん、遠くて…………近い場所にいるから…………。」

そう…………俺は遠くて近い場所にいる…………

「何わけわかんないこといってんだ？」

「とにかく、行ってくる！」

「お、おい！コナン……！」

おっちゃんが何か叫んでいたが聞こえなかった。
聞こえていたのは…………

悪魔のささやきだけ…………

悪魔の演奏だけ・・・

黒い音色だけ・・・

見えていたのは・・・

俺の心・・・

秘めていたのは・・・

1つの・・・

固い決心だけ・
・
・
・
・
・
・

第四章 遠くて近い場所（後書き）

作者の雑談

作「とうとう蘭ちゃんさらわれちゃいましたね」

コ「ああ・・・蘭・蘭~~~~!!」

哀「これは重症ね・・・」

作「どうします？蘭ちゃん返してあげます？」

哀「まだいいんじゃない？面白いし♪」

作「それもそうですね。」

コ「おいしいい!!」

ちゃんちゃん♪

第四章 遠くて近い場所

「ど．．．したの？」

「蘭が．．．誘拐．．．されちゃった．．．」

推測が、確信へと、真実へと変わった。

「犯人．．．の情報．．．は？」

「黒いスーツを着た、銀髪の長げえ奴だ．．．。」

「（ジンだ!）」

「要求は．．．?」

「．．．．．~~~~~．．．。」

え．．．．．?

今．．．なん．．．．．て．．．?

「工藤新一を出せ．．．。」

そして、俺の中に渦巻いていた、悲しみが、怒りへと変わった。

何故俺を狙わないんだ・・・？！

遠回しにするんだ・・・？！

答えは簡単・・・

俺を・・・

苦しめる．．．．ため．．．。

大切な人を人質にし、俺を苦しめるため。

俺の思考を狂わすため．．．．。

そんなこと、最初からわかっていたはずではないか．．．？

心の片隅で、逃げていたんだ。

そんなはずがない．．．と。

一番奴等に怯えていたのは．．．

俺なのかもしれない………

「それ……だけ？」

「ああ。」

「…………ボク、新一兄ちゃんに言ってくる！」

「ちよ、ちよと待て！お前、新一の居場所、知ってんのか？！」

「……！」

俺は、正直、戸惑った。

言っちゃおうか……？

そう思ったとき、組織に対する、恐怖が、襲ってきた。

「知らない……。でも、新一兄ちゃん、遠くて……近い場所にいるから……。」

そう……俺は遠くて近い場所にいる……

「何わけわかんないこといってんだ？」

「とにかく、行ってくる！」

「お、おい！コナン……！」

おっちゃんが何か叫んでいたが聞こえなかった。
聞こえていたのは……

悪魔のささやきだけ……

悪魔の演奏だけ・・・

黒い音色だけ・・・

見えていたのは・・・

俺の心・・・

秘めていたのは・・・

1つの・・・

固い決心だけ・
・
・
・
・
・
・

第四章 遠くて近い場所（後書き）

作者の雑談

とうとう蘭ちゃんさらわれてしまいました。

小説家になろう！ で連載している奴も、蘭ちゃんさらわれちゃって…。

さらわれっぱなし…

コ「お前のせいだろ?! 蘭を返せ!」

作「嫌!（ぷいっ!）」

コ「嫌じゃねーよ!」

第五章 試合（ゲーム）開始

「灰原ア！」

「・・・何？」

「蘭がジンに誘拐されちゃった！」

「・・・え?!」

「アイツの要求はただ一つ・・・工藤新一だ・・・。」

「そう・・・。」

「だから頼む！解毒剤の試作品・・・くれ！」

「・・・死ぬかもしれないわよ？」

「えっ？」

「改良してたの・・・でもまだ改良途中。もしかしたら文化祭の時よりももたないかも知れない。マウス実験もしてないのよ？それでも・・・飲む？」

「・・・ああ・・・！」

「わかったわ。コレ・・・。」

「サンキュー」

「工藤君・・・死なないでね？」

「ああ。んじゃ行ってくる。」

そして俺はまず隣の部屋で服を着替えた。

そして・・・

「ツ・・・ぐっ・・・うっうわああ・・・！」

「工藤君・・・？」

「だいじょーぶ・・・。」

そして俺は部屋を出た。

「・・・！」

「んだよ？」

「ふ・・・別に。」

そして哀は思った。

工藤君の高校生姿に見とれていた・・・なんて口が裂けてもいえないわね・・・

「変な奴。」

「早くいつてらっしゃい。もって5時間よ。」

「わかった。」

そして、俺は走った。

新一のときもコナンも通いなれた探偵事務所への道のりを・・・

そして、俺はもう一度計画を頭の中で描いた。

1つの決心をもう一度新たに心に決め、走った。

ガチャ・・・

「「「!!!」」」

「こんばんは。お久しぶりです。」

俺はみんなが集まっているだろうとこの場所に来た。

「工藤君?！」

「し、しーんーいーちー!」

目暮警部とおっちゃんと言った。

おっちゃんはかなりキレているよう。ハハ・・・当たり前か・・・。

「事情はコナンから聞きました。」

「だったら早く蘭を・・・！」

「わかってます。おそらく今回蘭を誘拐したのは今僕が追っている事件の関係者でしょう。」

「何?!」

「僕が今追っている事件は、数人単位の人間ではありません。10万・・・もしかたかもっといるかもしれません。」

「なんだって?!」

「だから僕は日本に戻ってきました。ついさっき。」

「外国にいたのか?!オメー！」

「まあ、そういうことにしておきましょう。」

「工藤君。作戦はあるのかね？」

「ええ。まず・・・」

そして計画は実行に移されることになった。

まず、俺が乗り込み、出来る範囲で奴らを倒す。

そして蘭を警察に渡し、そこから一部の警察官たちも混ざり、奴らを取り押さえる。

何よりも蘭の身の安全が最優先に・・・となった。

「よし・・・それじゃ行くとすつか。」

「探偵君？」

「?!」

「お久しぶりです。」

「キ、キッド?!」

「元に戻れたんですか？」

「いや・・・一時的。」

「そうですか。」

「何の用だよ？」

「いや・・・ちよつとお手伝いすることはないかと。」

「そりゃありがたいけど。」

「けど？」

「あんま借り、作りたくねー・・・。」

「これは借りではありません。私がやりたくてやっているのです。

貴方も私と同じ境遇ですから・・・。」

「はあ？」

「とにかくこれは借りではありません。お願いです。手伝わせてください。」

「べ、別にいいけど。危ねーぜ？」

「ダイジョウブ。青森警部で慣れてますから。」

「あつそう。」

「何をすればいいですか？」

「俺になつてくれ。口調もな。」

「わかりました。・・・これでどうだ？探偵君？」

「ああ。」

キッドは一瞬のうちに俺に変装した。

「んで・・・。」

俺はちよつと危ないことを頼んだ。

「どうだ？やってくれるか？」

「もちろん。」

「そっか・・・本当に・・・いいんだな？死ぬかもしれないんだぞ？」

「ああ。いいって言ってんだろ？」
「サンキュー……。一緒に乗り込むぞ。いいか？」
「ああ。」

ガラガラ……

「おい！ジン！居るのはわかってんだ！さっさと姿を現したらどうだ？！」

「フフフ……。さすが東の名探偵、工藤新一……。」

「蘭はどこだ？！」

快斗が言った。

そう……

俺が頼んだことそれは……

「んで……。俺の代わりに蘭を助けてほしい……。」
「助ける？」

「ああ。おそらく蘭は俺たちがたどり着くのが困難な場所にいる。それに人数も何人いるかわからね……。だからどちらかが身代わりになる必要があるんだ。それで俺が奴らを引き止めているうちに蘭とここを出てほしいんだ。近くには目暮警部も、おっちゃんもいる。」

「……。だったら俺が身代わりになったほうがいいんじゃないか？」
「えっ？！」

「……。やっぱ助かったときに一番に会いたいのは、お前だろ？」

「でもそうしたらオメーが死ぬかもしれねーんだぞ？」
「百も承知さ。最初に言つたる？オメーと俺は同じ境遇だつて。」
「そつか・本当に・・・いいんだな？死ぬかもしれないんだぞ？」
「ああ。いいつて言つてんだろ？」
「サンキュー・・・。一緒に乗り込むぞ。いいか？」
「ああ。」

「さあ答える！蘭はどこだ？！」

快斗はいかにも新一だといわんばかりの名演技だ。

「フツ・・・そんなにあの小娘が大事か？」

「か、かんけーないだろ？さつさと渡せ！」

「そう簡単には渡せないな・・・条件がある。」

「・・・なんだ？」

「・・・お前に死んでもらう！！」

ジンは銃を出した。

「あつゝやっぱり？・・・でもそう簡単に殺されてたまるかつての
！！」

ドオン――・・・・・・・・！！

「かすつてもねーよ！」

快斗は持ち前の身軽さでよけた。

何度も何度も銃声と何人もの声が聞こえた――……。そして新一は快斗に悪いと思いながらも先へ進んだ。

「らん！！！！」

「し・ん・ん・い・ち？」

「蘭?!どこだ?!」

「……し……ん……ち……」

「蘭！」

そこには手足を縛られ身動きが出来ず、苦しんでいる蘭がいた。

「どうしたんだ?！」

「がっこ……ぶか……つ終わって……帰る……とき……な……んか……眠く……なつて……。」

「睡眠薬か？！……くっそ……！！」

「し・んい・ち?・どう・して・いい?」

「コナンに聞いたんだよ。そんなことより誰もいないのか？」

「うん．．．さつき．．．下で新一が．．．来た．．．って．．．で
てっちゃんた．．．。新一が．．．ここに．．．いたら．．．きちや
う．．．よ?」

「だいじょーぶ♪下は、かい・・・じゃなくてキッドが俺に変装してくれてるから。」

「キッド……が？」

「ああ。んなことより早く逃げるぞ。ホラ。」

そして俺は蘭をおんぶしようとした……が……

「ありがと．．．でも、私．．行けないわ。」

「なんで?!」

「だって．．．．．。」「

ドス――………！」

鈍い音とともに聞こえた言葉．．．それは．．．

「だって私……“蘭”じゃないもの。」

ドス――……………！

「ぐっ………！」

蘭が俺の背中にナイフを刺した。

「ら……ん？」

「だから私は蘭じゃないってばあ！私は夏美。まだ組織に入って3日目だからコードネームもらってないのよ。」

「んだと……？じゃ……蘭は？」

「まだ寝てるんじゃないかしら？」

「ヤロオ……………」

「ホホホホ……………」

第五章 試合（ゲーム）開始（後書き）

作者の雑談

新「蘭が・・蘭が刺した・・!」

夏美「うるさいわね、私は蘭じゃないってば!」

新「蘭・・蘭・・!」

哀 ボガ!ドガッ!ドス!

「ふうやつと静かになったわね。」

作・夏美「あ、あのお哀サン?新一君は?」

哀「さあ?」

作・夏美「・・・・・。」

第六章 大切な奴

「じ、じゃあ、俺が乗り込んで・・・く・・・る・・・ことも、下にいる奴が・・・に、偽者だってことも・・・知って・・・たのか・・・？」
「ええ。見てるのが面白かったわ。」

「・・・つくそ・・・。」

「ホホホ・・・バカな子・・・。そんなにあの子が大事かしら・・・？」

「ああ・・・。」

「？」

「この世で・・・い・・・ちばん・・・死なせたく・・・ない・・・奴・・・だよ。」

「ふっ・・・これでも自分の身より彼女が大事って言えるかしら・・・？」

「！！！」

ガチャ・・・

その女、夏美が持っていたもの、それは拳銃。

「貴方を連れて行けためなら、どんな手段を使ってもいいっていわれたわ。たとえ、首から下がなくても・・・ね。」

「そんな・・・んで・・・縮こまる・・・よ・・・うな・・・俺じゃ・・・ねーよ。」

「そんな口が利けるのも今のうちよ。」

ああ、そうさ・・・。

俺は蘭が大事さ・・・

この世で一番死なせたくない奴・・・

蘭は、俺の光・・・

時には、太陽となり、まぶしいほどの笑顔を見せてくれる。

そして、また時には、月となり、俺の心を照らしてくれる。

そんな光を失ってたまるか・・・！

たとえ、この命に代えても、守る・・・

守ってみせる・・・！

「・・・蘭・・・はどこだ・・・?!」

「さあね？ジンが連れて行っただわ。」

「ならそこをどけ・・・」

「いいわよ。そんな体でいけるのなら・・・ね？」

そして夏美はスッと脇へよけた。

新一をご馬鹿にしたような笑みを浮かべて・・・

「お前には・・・わかんねー・・・だろうな・・・人を好きになる・・・
って気持ちがある・・・好きな・・・き、気持ちが・・・どれだけ・・・怪
我をしても・・・自分も・・・う、動かす・・・ってこと
がない・・・。」

「そんな綺麗事言っただけのも今のうち・・・」
そして俺は、フツと笑った。

「・・・るよ・・・。」

「ん？」

「見せてやるよ・・・お前に・・・綺麗事なんか・・・じゃ・・・
ねーって・・・ことを・・・な・・・。」

「な、なにを・・・」
パシュ・・・

バタツ・・・

俺は一瞬の隙を狙って、麻酔針を打ち込んだ。

「・・・ら・・・ん？」

帰ってくることはない人への呼びかけ。

どこへ行ってしまったのか、分からない人の名前。

俺の声だけが虚しく響いた。

「無様だな・・・。」

「!!」

「久しぶり・・・だな。」

「・・・ジン・・・!」

第六章 大切な奴（後書き）

作者の雑談

ここまで読んでくださった皆様へ

第四章を2度投稿してしまい、すみませんでした・・・。

第七章 すべての黒が終わるとき

「無様だな……。」

「!!」

「久しぶり……だな。」

「……ジン……!!」

「日本警察の救世主といわれたお前がこんなところでくたばるとなあ……。」

「ま、まだ死んでねーよ……!」

「じゃ死んでもらうか。」

ガチャ……

「おっと、物騒なモノ持ってますね。」

「だ、誰だ!」

ポン……

どこから来たのか、煙とともに、新一……いや快斗がいた。

「工藤新一が……二人だと……?」

「もう……!みんなそういうんだから。俺は新一じゃないのに……!」

「なにごちゃごちゃ言ってるんだ!工藤新一!」

「だから、俺は……新一じゃないってば!」

ポコッ!

なにか金属製のものでジンの頭をたたいた。

「ぐ……!」

ジンは気を失った。

「“悪いいな、お前を死なせるわけにはいかねーんだよ……探偵としてな……” だろ?」

「……ひ、人の台詞……取んじゃ……ねーよ……!」

「まあまあ、ここは俺に任せて!」

「工藤新一……がここにいたら大変だろ……二人も……」

「んじゃ……キッドに戻りますか。」

「どうですか？探偵君？」

「キッドと快斗の使い分けが・・・う、うまいんだな・・・。」

「お褒めに預かって光栄ですよ。」

「べ、別に褒めて・・・ゴホッ！」

「お、おい、大丈夫かよ?!」

キッドはすっかりキッドの敬語を忘れていた。

「あ、ああ。ゴホッ！ガハッ・・・！」

「・・・そんな風にむせて血イ吐いても説得力ねーつうの！」

「わ、悪かったな。」

「ホラ、おぶつてやるよ。」

「そ、そんなことしたら、キッドの衣装が・・・」

「んなこと言ってる場合かよ?!あの娘に会えないで死ぬのか?!早くしないとジンとかいう奴も目覚ましちまう!ホラ、早く!!」

「わ、悪いいな。」

「いいって。」

そしてキッドは新一をあまり揺らさぬよう、でも急いで歩いた。

そして・・・

「ら、蘭?!」

「新・一?」

「今度は本物かな?」

「新・一?どうして?そ、それに・・・キッド?」

「事情は後・・・だ。と、とにかくここから出よう。」

「よお。工藤新一・・・・・・・・。」

「う、ウォッカ・・・・!」

「よくジンの兄貴を倒せたな。褒めてやるぜ・・・・。だがな・・・・」

「ここがお前らの墓場だ!」

「そ、それはどうかな?」

「何っ?!」

「手を上げる!銃を捨て、大人しくしろっ!」

「警察か?!」

「言っただろ?..どうかって..」

「くそっ!..こうなったら..」

「や、やめろ!..ウオツ..」

ド
オ
ン
—
.
.
.

すべてのもじりが、

罪が、

この一発の銃声でピリオドを打った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0155a/>

水色の季節にまた・・・～今はまだ今のままで・・・～

2010年10月9日23時53分発行